

「バルバロッサ作戦」の舞台裏

檜山良昭

◆作家

ドイツはソ連侵攻をいかに陰蔽・欺瞞しようとしたか



《バルバロッサ作戦を発動したヒトラー》

1

ドイツの戦争指導部が対ソ戦の可能性を考へはじめたのは一九四〇年六月末、つまり西方戦役がドイツ軍の勝利に終わってまもなくのことである。

ソ連はドイツ軍がフランスやオランダで戦っているとさくさに紛れて、バルト三国を併合し、ルーマニ

アからベッサラビア地方とブコビナ地方を恐喝まがいの方法で奪い取った。この結果、ヒトラーをはじめドイツの戦争指導部は、「ドイツがイギリスと戦っている最中に、ソ連はドイツを攻撃するのではないか」と疑心暗鬼に駆られた。

おりしもイギリスの首相に就任したウィンストン・チャーチルはソ連の抱き込みを計り、労働党員である

スタフォード・クリップスをソ連駐在大使に任命した。クリップスは六月末にモスクワに到着し、七月一日に協力を訴えたチャーチルの書簡をスターリンに手渡した。

これを知ったドイツの戦争指導部は、イギリスとソ連の同盟が成立するのを恐れ、その前にソ連のドイツに対する脅威を取り除こうと考えたのである。

九月までに対ソ戦の基本的な作戦

案は出来上がり、その準備に責任を持つ国防軍最高司令部は動きはじめた。作戦が成功するかどうかは、奇襲に成功するかどうかにかかっている。ソ連側にドイツ軍の攻撃の意図を察知されれば、成功はおぼつかないのである。

対ソ戦に必要とされる総兵力は陸軍だけで百四十五個師団に達する。この兵力をソ連側に察知されないでどうやって東方国境に集中できる

か。国防軍最高司令部がもつとも頭を痛めたのがこの難問であった。

ドイツ軍の主力はイギリス本土への上陸作戦に備えて、ノルウェーからフランスまでの西方の大西洋岸に集中している。ソ連と国境を接している東部にはわずかに三十六個師団しか配備されていない。ここに百個師団以上を西方から移動させれば、いかにソ連の情報機関が愚鈍でも、ドイツの攻撃の意図を察知してしま

うだろう。

ここから大規模な兵力移動をごまかすための大掛かりな謀略が行われることになったのである。

九月六日、国防軍最高司令部統帥局長であるアルフレート・ヨードル中將は全陸軍に対して「東部、本国、西部の間の交代策」と題した通達を送った。その中で彼は書いてある。

「東部への兵力移動は徐々に慎重に行う必要がある。対ソ関係が必ずしも友好的ではない現状では、我々の意図をソ連側に察知されてはならない。このためもつとも効果的なやり方は、東部への兵力移動は現在実施中である師団の改編作業のための輸送に紛れ込ませることである」

八月一日からドイツ軍は次の年の四月までに野戦軍百八十個師団、予備軍二十個師団の師団改編計画に取

り掛かっていた。野戦軍のうち現在の十個戦車師団を三十六個戦車師団に、七個自動車化師団を十八個自動車化師団に増強する予定である。

そこで西部や東部の師団は順次改編を行うためにドイツ本国に移動していたし、またドイツ本国で新設された師団が西部や東部に輸送されていた。ヨードル統帥局長は対ソ戦のための西部から東部への移動を、この目まぐるしい移動に紛れこませようというものである。

同じ九月八日、ヨードル中將の下であるワルリモント国土防衛課長は、カナリス対外諜報局長と会談して、

「ドイツ軍の西部から東部への兵力移動はイギリス軍からの空爆を避けて訓練するためであるという逆情報流してほしい」ともちかけた。

九月になると、イギリス本土からフランス沿岸の軍港や軍事施設に対して空襲が加えられるようになった。ワルリモント国土防衛課長はこの点に目をつけたのである。

九月十二日、カナリス提督の部下であるベンチベニー諜報局破壊工作課長はカナリス提督からの指示を受けて、大規模な逆情報工作を立案した。そして九月十八日から、「青い

鳥作戦」と命名された、この作戦を実行に移した。

九月二十日、フランスのセーヌ湾に近いカーンに駐屯していた第九軍団司令部は、

「十九日夜の空襲でかなりの被害を受けた」

という偽電を打電した。

三日後、陸軍最高司令部は第九軍団に対して、

「第九軍団はイギリス空軍による空襲の被害を避けるために、東プロイセンに移動し、イギリス本土上陸作戦の訓練を実施せよ」と命じた。

この後も、イギリス空軍の空襲があると、ドイツ軍は誇大な被害を報告し、陸軍最高司令部は第九軍団に発したと同じ命令を与えた。

ドイツ軍の兵力輸送は巧妙を極めた。西部から東部への一方的な移動はソ連の警戒心を誘うだろう。そこで陸軍最高司令部の輸送課長であるゲールケ大佐は、東部の兵力を本国や西部に送ることもした。また偽装用の部隊を編成し、これを東部、本国、西部、本国と、絶えず移動させて、ソ連の情報機関の目を欺こうとした。

十月二十四日、フランスのフォンテンブローに位置していた陸軍最高

司令部は、本国のツォッセンに移動したが、このどさくさに紛れてフランスにいたB軍集団司令部、第四軍司令部、第十二軍司令部はポーランドのワルシャワに密かに移動した。このときまでに、ドイツ軍は約百万名の兵力を東部に輸送し、約三十万名を東部から本国や西部に輸送していた。

東部のドイツ軍がこれだけの兵力に膨れ上がると、再編成のためとか、空襲を避けて訓練するためでは通らない。そこでドイツ軍は新しい偽装作戦をはじめた。

今度のソ連を欺くための嘘は、

「ドイツ軍主力がイギリス本土に上陸しているあいだ、東部国境を防御するためである」

というのである。

十月二十五日、ゲッベルス宣伝大臣はラジオ放送で、

「ドイツはソ連との友好関係を保つが、もしソ連が東部領土に侵入した場合には、断固これを撃退する覚悟である」

と演説した。

これをきっかけにドイツでは、ラジオや新聞で、「ドイツ軍主力がイギリス本土に上陸している間にソ連軍がドイツ領に侵入してくるかもしれない」という報道が相次いだ。十



ヨードル統帥局長

一月一日、国防軍最高司令部新聞部は定例の記者会見で、

「ソ連とは友好を保つというのが我が国の基本政策だが、まがいちソ連が西部ポーランドに侵入する場合は必要な防衛的な措置をとるつもりである。現在国防軍は東部方面において防衛態勢を整えつつある」と説明した。

対ソ戦ともなれば、ドイツ本国からソ連領に向けての大規模な輸送路が必要となってくる。このための鉄道や幹線道路の建設計画は「オートー計画」と呼ばれ、十月初めから「トット機関」によってはじめられた。「トット機関」とは、ヒトラーがたいそう気に入っているフリッツ・トット博士を長とする建築や土木の技師団の組織である。有名なアウトバーンも「トット機関」が建設したものである。

ヒトラーは「トット機関」を利用



カナリス対外謀報局長

して、ソ連を欺くことを考えた。十月四日、ヒトラーはヨードル中将に次の指示を与えた。

「トット機関は東部国境を防衛するための要塞を建設しているという偽装工作を行うのだ。現在建設している道路や鉄道は要塞建設のための資材を輸送するためのものであるとソ連に信じこませるのだ」

これを受けて、十月下旬から、トット機関はポーランド人労働者を使って、ポーランドでのソ連との国境であるブーグ河西岸に長さが百五十キロに及ぶ要塞を建設しはじめた。もちろん本格的な要塞ではない。トット博士は、

「偽装要塞の工事はできるだけゆとりと進めるように」

という指示を受けていた。

2

ヒトラーが「バルバロッサ計画」として有名な「総統指導要綱第二十一号」を裁可したのは十二月十七日である。「バルバロッサ計画」とは対ソ奇襲作戦の暗号名である。

翌十八日、国防軍最高司令部はこれを九部だけ印刷して、陸、海、空の三軍の最高司令部に配布した。開戦予定日は来年の五月十六日である。

年が明けて一九四一年になった。陸軍最高司令部の作戦部長であるホイジンガー少将は、一月二十九日に兵力輸送計画を作り上げた。それは五段階に分けられていた。

第一段階 三月十二日まで。現在の輸送計画を続行する。

第二段階 三月十三日から四月十二日まで 十七個師団を輸送する。

第三段階 四月十三日から五月十二日まで 十七個師団を輸送する。

第四段階 四月二十五日から五月十五日まで 二十四個師団を輸送する。

第五段階 五月十六日以降 三十個師団

ヒトラーは前年の十一月十二日に

「マリタ作戦」というギリシア攻略作戦の準備を命令していた。ギリシアではイギリス軍に支援されたギリシア軍がイタリア軍を破り、逆にイタリアが占領しているアルバニアに侵入している。

ヒトラーは対ソ戦争の間にギリシアにイギリス軍が上陸して、ドイツ軍の腹部を衝くことを恐れた。そこで対ソ戦の前にギリシアを占領しておこうと考えたのである。

二月三日の軍事会議で、ヒトラーは述べた。

「最近になってソ連は、これまで以上に東部国境に注意を注いでいる。まだ我々の意図を察知してはいないが、このままであれば、いずれは察知するのは時間の問題である。バルバロッサ計画のための兵力集中はマリタ作戦のための兵力集中であるように偽装するのだ」

ヒトラーは不安になったのか、翌日になってレーダー海軍最高司令官に對して、

「イギリスに対する通商破壊戦を強化するのだ。なぜならば、イギリス本土攻撃を続行することで、我々の目標はイギリス本土であると思わせないでなければならないからだ」と告げた。

二月六日、ヒトラーの言葉は総統

指導要綱第二十三号として、正式に海軍に命令された。

「バルバロッサ計画のための兵力の集結が行われるまで、空と海からの攻撃を強化するように務めよ。これはイギリスに対して甚大な被害を与えるためばかりか、イギリス本土に対する攻撃が今年度中にも計画されているという印象を与えるために必要である」

二月十五日、ワルリモント国防衛課長は「敵を欺くための手引き」と題したパンフレットを三軍の最高司令部に配布した。

「兵力集結の第二段階が終わる四月半ばまでに、七十五個師団が所定の位置に配置される。このときまでは、東部への兵力輸送は本国や西部の兵力の単なる交代のためであると信じこませることができよう。だが、第三段階の輸送が始まると、そのように信じこませることは難しい。したが



ゲッベルス宣伝大臣

って、兵力輸送の第三段階以降では、マリタ作戦のための後方予備兵力の輸送であると信じさせる工作を開始する予定である。さらにマリタ作戦が完了した後では、東部への兵力輸送はイギリス本土上陸作戦のさの背面防衛のためであると思ひ込ませる工作をはじめの予定である」

カナリス提督の国防軍諜報局やハインリッヒ・ヒムラーの指揮下にある親衛隊保安情報部は、さまざまなルートで、「ドイツ軍はギリシア侵攻のために東部に兵力を輸送している」という情報を流しはじめた。いっぽうゲッベルスの宣伝省は、連日にわたってイギリスとの戦いの戦果を報道し、世界の関心をイギリス本土に向けさせようとした。

ギリシア攻撃のためのドイツ軍第十二軍がブルガリアに入ったのは三月一日である。ソ連のモロトフ外相はドイツのシュレーンブルク大使に、

「ブルガリアはソ連の安全保障圏に属している。軍事進駐したことは遺憾である」

と抗議したが、大使はベルリンの外務省に、

「ソ連は抗議をしたが、それ以上の行動はとらないだろう」と報告した。

三月十三日からは、ドイツ軍の第二段階の兵力輸送が始まった。欺瞞工作のためにワルリモント国防衛課長は「アルビーアン作戦」という欺瞞作戦を立案した。これはいよいよドイツ軍がイギリス本土上陸作戦の準備を始めたと思ひこませるための工作である。

三月十二日、陸軍最高司令部は西部に駐留している部隊に「アルビーアン作戦」の実行を命じた。これはイギリス海峡とノルウェー海峡との一部を封鎖し、またオランダとフランスの軍港を閉鎖する作戦である。その命令書は言う。

「この作戦を実行するにあたり、大量の兵力を投入したり、事細かなことに関わる必要はない。だが、適切な方法で最大の効果を上げることが望ましい。この作戦によってイギリス本土にたいする奇襲が準備されているという印象を作り出すべきである」

同時に陸軍最高司令部はポーランドに駐留しているB軍集団司令部に、

「所定の計画にしたがってソ連との国境沿いに偽装要塞を建設すべきである。これはイギリスに対する奇襲作戦のさいに、ドイツが東部で後方防衛を行っていると思わせるためである」

ある」

と指示した。

ドイツがソ連を欺くための逆情報流したり、欺瞞工作を行っても、ソ連の情報機関がこれを正確にキャッチしなければ意味がない。真実の情報を遮断し、誤った情報だけをソ連に渡すには、ソ連の情報機関をコントロール出来なければだめである。

国防軍諜報局長のカナリス提督は部下のベンチベニー大佐に次のような指示を与えた。

「1、ソ連の情報機関に対して、防諜課は積極的な防諜活動を行う準備を始めよ。例えば、必要な防諜部隊を編成するとか、これを東部の作戦に参加する野戦部隊に配属するとか、ソ連の情報機関や防諜機関の活動を麻痺させるとかの活動である。」

2、ソ連の国外の情報員を通じて、偽の情報を広められたい。特にこの偽情報はソ連との関係改善であるとか、イギリスに対する奇襲の準備だとかの印象を与えるべきである。

3、ソ連に対する戦争の準備や東部への兵力移動は極秘にしないといけない。このため防諜策は完璧にしておくはならない」

国防軍諜報局が欺瞞情報を流した

例は二例だけが記録に残っている。

ベルリンに駐在するソ連陸軍武官のツピコフ少将と東京に駐在するソ連武官とに欺瞞情報を流した例である。

おそらく全世界的な範囲で、ドイツの情報機関はソ連の情報機関に欺瞞情報を流したと考えられる。この工作の元締めであるワルリモント少将は、戦後の回想録の中で、「戦争の歴史の中で最大規模の欺瞞作戦であった」と述べているほどである。

奇襲攻撃のための欺瞞作戦と言えば、真珠湾奇襲作戦のときの日本海軍の欺瞞作戦が連想出来るが、その規模と手が込んでいることでは、ドイツのこれには及びもつかないだろう。

3

ドイツ軍の兵力輸送計画は順調に進むかにみえた。三月二十五日にはブルガリア領内に入ったドイツ第十二軍はギリシアへの侵攻の態勢を整えた。開戦予定日は四月一日であった。

ところがここで予想もしない突発事が起きたのである。それはユーゴスラビアの政変である。二十五日にユーゴスラビアの親独政府が枢軸

同盟条約に調印すると、親英派がクーデターを起こし、親独派を一掃したのである。

ユーゴスラビアがイギリス側に立てば、ギリシアに侵攻する第十二軍が脅かされるし、対ソ戦争になってドイツ軍南方軍集団が腹部に脅威を受けることになる。

すかさずヒトラーはユーゴスラビアへの侵攻を決断し、ギリシア作戦を六日に延期して、ユーゴスラビア作戦に二十個師団を投入することにしたのである。この二十個師団は対ソ戦用の師団であり、これがユーゴスラビア攻略戦に使われると、対ソ戦の開戦予定日である五月十四日に開進位置に就けなくなってしまう。

この結果、ヒトラーは対ソ戦の開戦予定日を六月二十一日に延期した。結局この一ヶ月以上の延期が、バルバロッサ計画が不首尾に終わる原因となったのである。

四月四日、陸軍最高司令部のホイジンガー作戦部長は、ゲールケ輸送課長が作成した新しい輸送計画をハルダー参謀総長に提出した。それは四月十三日から始まる輸送計画第三段階を四月七日に繰り上げ、六日に予定されているギリシア攻撃作戦のどさくさに紛れ込ませていた。第三段階は五月二十日に終え、第四段階

は五月二十三日から六月二十三日とされた。

四月二十三日はギリシア制圧が明らかになった日であるが、ギリシア作戦の間にウィーンに進出していた陸軍最高司令部がこの日にツォッセンに戻った。その翌日である二十四日、陸軍最高司令部は西部に駐留している六十個師団に対して「フカ作戦」を発令したのである。

このころになると、ソ連と国境を接している東部には、約百個師団が駐留し、膨大な軍需物資が集積されていた。「ドイツがソ連を攻撃するかもしれない」という噂が飛び交っていった。

例えば四月二十四日、モスクワに駐在するドイツの海軍武官は国防軍最高司令部に次のような報告を送っている。

「1、ドイツとソ連とが戦争になるという噂がモスクワで流れている。

2、イタリア大使館領事からの情報では、イギリス大使が彼にドイツ軍の攻撃は六月二十二日に行われると予言したという。

3、ある人物は、ドイツ軍の攻撃は五月二十日に行われると断言している」

ドイツ側の巧妙な欺瞞作戦にもかかわらず、ドイツ軍のソ連攻撃の情

報は広まりつつあった。「フカ作戦」はこのような情報を打ち消すために考えられた欺瞞作戦だった。

四月二十五日、ノルウェーからフランスのブレストに至るまでの六十個師団のドイツ軍が非常呼集をかけられ、戦闘態勢に入った。二十七日には、オステンド、ダンケルク、カレー、ル・アーブル等の海岸や港に向かつて一部のドイツ軍が集結しはじめた。

「フカ作戦」とは、西部のドイツ軍がイギリス本土上陸作戦を実行するように見せかける欺瞞作戦だったのである。

これがどれほど他国の判断を狂わせたかは、四月三十日にベルリンで開かれた日本のヨーロッパ駐在武官会議が良く示している。ヨーロッパの各国に駐在する日本の武官達が一同に会してのこの会議では、近くドイツ軍はイギリス本土に侵攻するだろうという見方で一致し、これに疑いを持つ者はいなかったのである。この会議では、ドイツ軍がソ連を攻撃するという噂は、イギリス本土侵攻作戦のカモフラージュであると判断されたのである。

四月二十日にヒトラーはリッペン・トロープ外相に、「ソ連を攻撃するのは不動の決心で



リッペントロフ外相

ある。これからはソ連とはいかなる外交交渉も行つてはいけない。ソ連がどう交渉してきても、私の決心は変わらないからだ。外交交渉は奇襲という戦術的武器をだめにしてしまふ」

と告げた。

二十八日にはモスクワから一時帰国したシェーレンブルク大使に、ヒトラーはこう言った。

「対ソ戦争が勝利するかどうかは、奇襲に成功するかどうかにかかっている。事前にソ連に意図を察知され、防衛の準備をされては、一年間の準備が水泡に帰してしまふ。ソ連は我々の意図を探ろうと、あれこれ外交的な働きかけを行うだろうが、すべて無視するのだ」

二日後である四月三十日に、ヒトラーは対ソ戦の開戦予定日を六月二十二日未明と定めた。この日の軍事会議に出席したワルリモント国土防

衛課長は、「海軍もフカ作戦を実行すべきである」と提案した。

おりしもドイツ海軍は「ライン演習」と名づけた艦隊作戦を計画していた。これはドイツ海軍が誇る戦艦のビスマルクとティルピッツを大西洋に出撃させ、イギリスの輸送船団を攻撃させるという作戦である。

ワルリモント国土防衛課長は「ライン演習」をフカ作戦に利用することを思いついた。ビスマルクとティルピッツが大西洋に出撃すれば、全世界の眼はこれに注がれ、陸軍のフカ作戦と合わせて、「ドイツ軍のイギリス本土侵攻作戦は近いうちに行われる」という印象を与えられるからである。

そのためにはビスマルクとティルピッツの出撃は秘密であつては効果がない。むしろ全世界にそれを公表して、世界の視線をこの二隻の弩級戦艦に引き寄せる必要がある。

五月一日に海軍最高司令部は、「フカ作戦を実行すべし」というヒトラーの命令を受けとり、ライン演習の準備に入った。五日にはヒトラーがゲーテンハーヘン軍港のビスマルクとティルピッツを訪れ、将兵を激励した。この模様はドイツのラジオや新聞が大々的に報道し、世界に伝わった。

戦艦ビスマルクの出撃はドイツのマスコミによって大々的に報道され、世界の耳目はこれに集まった。

それでも、独ソ戦の噂は消えなかった。モスクワのシェーレンブルク大使は、

「モスクワでは緊張が高まっている。ドイツとソ連とが戦争になるといふ噂がいつそう広まっている」とベルリンに報告した。

外相のリッペントロフは五月二日に外務省幹部会議で、

「総統閣下はソ連の指導部が我々の攻撃の意図を察知したのではないかと心配しておられる」と告げ、

「早急にソ連の警戒心を解くために手を打つべきである」と述べた。

そこで外務省はシェーレンブルク大使に次のように訓令を送った。

「ドイツとソ連とが戦争になるといふ噂は、井戸に毒を投げこもうとしているイギリスの謀略にすぎない。ロシアとの国境に沿って集結したドイツ軍は、たんにバルカン作戦のための後方防衛を目的としている、とソ連外務省に説明されたい」

いっぽうワルリモント国土防衛課長とカナリス諜報局長は相談して、「戦争の噂はデマである、まもなく

東部からは八個師団が西部に輸送されるという偽情報を流す。また三個師団ほどの予備部隊をひそかに東部に送り、鳴り物入りでこれを西部に送る、この部隊はできるだけ大部隊に見えるように偽装する」と決めた。

4

ドイツ軍の兵力輸送は順調に進み、五月二十日には第三段階の輸送計画が完了し、二十三日からは最後の段階が始まるはずである。今やドイツ軍の東部での兵力集中は隠しうもなく、ソ連のスターリンを始めとする指導部も警戒するようになっていた。ドイツの情報機関はソ連軍が毎日のようにドイツの国境方面に急送されていることを報告した。

ドイツ軍の謀略は最後の局面に入り、いっそう手の込んだ謀略が行われた。五月十七日に外務省のワイツゼッカー次官はスウェーデン大使と日本大使を招き、

「ドイツ軍の集結は、ソ連軍の集結に対抗するための防衛的なものである。ドイツとソ連との関係は、スターリンしだいである」と告げた。

もちろんこれはソ連に伝わること

を計算してのことである。

ドイツ側はスターリンが戦争を望んではいないことを知っていた。そこで、ドイツ軍の兵力集結はソ連軍の兵力集結に対抗した防衛措置であると言え、スターリンが兵力輸送をためらうだろうと考えたのである。

ワルリモント国土防衛課長は「敵に対する偽装工作」と題したパンフレットを陸海空三軍の最高司令部に配布した。それは「フカ作戦」をいっそう進めて、イギリス本土上陸作戦が近く行われるような偽装工作を指示している。

宣伝省の幹部であるヴェルナー・ヴェヒターは宣伝員を街頭に繰り出し、駅やレストランや劇場などの人が集まった場所で「耳打ち作戦」を行った。これは隣り合わせた市民に、「近くドイツ軍はイギリス本土に侵攻するらしいぞ」と耳打ちするのである。

一般市民が宣伝省の統制下にあるラジオや新聞の報道を信じなくなっているときである。この耳打ち作戦はひそひそ話としてベルリンに広まった。

五月十八日、ベルリンに駐在するソ連大使館一等書記官であるバレンチン・ベレジュコフは市民の間で

「ドイツ軍が近くイギリス本土に侵攻する」という噂がベルリンでささやかれている」とモスクワに報告した。

親衛隊情報部はもっと大規模な逆情報工作を行った。情報部の職員三百六十名を一般の観光団に仕立て、フランスやオランダやスペインやモロッコに団体旅行させ、

「ドイツ本国ではイギリス本土上陸作戦が準備されている。それは近く実行されるはずだ」というデマを広めさせたのである。

開戦予定日の十日前である六月十二日、陸軍最高司令部は「第二次フカ作戦」を発令した。これは西部ヨーロッパに駐留する四十七個師団に動員令を下し、戦闘態勢に置く命令である。

ドイツ軍がソ連を攻撃するという情報は夥しくモスクワに届いた。しかし、それを打ち消す反対の情報も夥しくあった。ソ連のスターリンはこの相反する情報を受け取って混乱し、ドイツ軍の意図を正しく理解することができなかった。

六月二十二日未明、ドイツ軍は予定どおりソ連領内に殺到した。奇襲は完全に成功したのである。その裏にはドイツの総力をあげての大規模な欺瞞工作があったわけである。

◆編集室から◆

◆不勉強を打ち明けるようで恥ずかしい次第なのだが、欧州戦に関しては、これまでアメリカの参戦があったはじめて連合国が勝利を得た、と思っていた。たしかにそれも否定できないことであろうが、それ以上に、ソ連の頑張りがあったから、というのがより正しい認識のようである。

米軍のある高官も「勝利の九割はソ連の力による」といつている。その意味で「独ソ戦」の持つウエイトにもっと注目すべきなのかもしれない。何だかよくわからないフランス、ほとんど勝ったことのないイタリア、さすがと思わせるイギリスなど、太平洋とは一味違う「大軍」のぶつかり合った戦場である。(出口)

☆阪神震災の衝撃もさめやらぬ三月、東京を毒ガスが襲った。

いま都内の地下鉄で忘れ物でもしようものなら、「不審物」騒ぎが起ころうのは間違いない。「人を見たら殺人者と思え」ではあまりに哀しいが、何があってもおかしくないという覚悟は、個人も社会もともにしておくべきなのだろう。その意味では、あらゆる場所で、それこそあらゆることが起きた「世界大戦」から学ぶべき教訓は、きわめて多いのではないだろうか。(坂梨)

◇ドイツ軍のポーランド進攻によって始まり、日本の降伏で幕を閉じるまで、六年間にわたって戦われた第二次大戦では、連合軍四十七カ国、枢軸国八カ国、計五十五カ国が参戦した。戦死者四千万、うち二千五百万が民間人だ。史上未曾有の殺戮戦といつてよい。アメリカではこの戦争を「四兆ドル戦争」と呼んでいるという。膨大な戦費を費消したからだ。

それにしても、人類はこの戦いから一体、何を学んだのだろうか。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、加えて数多の紛争、内戦は枚挙に暇がない。この世に戦争がなくなる日が来ることを切望してやまない。(牛嶋)

◇次号は五十年の節目で「本土決戦と終戦」を特集、7月12日発売予定。

丸六月別冊「戦争と人物」⑧

第二次
世界大戦

平成七年六月十五日発行

定価 二〇〇円

編集人 牛嶋義勝

出口範樹

高城直一

株式会社 潮書房

発行所 株式会社 潮書房

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

本誌掲載の記事・写真の無断転載を禁じます